

1 校庭のアカマツ

学校と地域のシンボルとして、百年以上も校庭に立っていたアカマツ。わたしたちのお父さんもお母さんも、おじいちゃんもひいおじいちゃんも、この木の下で遊びました。みんなから愛されていたアカマツがかれるなんて、とても悲しいです。

—今まで本当にありがとう。さようなら—

平成十八年十二月十日、里美の通っている学校のシンボルだったアカマツが切られました！

この木は、今から百年以上前に地域の人から寄贈さされ、校庭に植えられました。子どもたちにとって、この木はかくれんぼの基地になったり、木かげをつくる大きな日がさになったりといつも大活躍でした。地域の人たちも、子どもたちから校庭にそびえ立つアカマツへの愛着は深く、多くの人に好かれていました。もちろん里美も、このアカマツが大好きでした。

やられて助かる見こみはないし、このままだと他の木にも害虫が移って、全てかれてしまうおそれがあるんだ。苦しい決断だけど、他の木を守ることも大切なんだよ。」

「そうですか—」

やむをえないことだと分かっているけど、里美の心はとても苦しくなりました。

平成十八年十二月十日、アカマツが切られる日。多くの子どもたちや地域の人たちが校庭に集まり、別れをおしました。悲しい顔の子どもたちと、アカマツの最後をしっかりと見つめる大人たち。静かな時間が流れる中、アカマツは切られていきました。

里美は切られていくアカマツをしつかりと見つめながら、心の中でアカマツに語りかけました。そして最後に静かにつぶやきました。

「今まで本当にありがとう。さようなら。」

松の木がなくなってから数ヶ月が経ったある日、

「まつぼっくりなら、あります。」

校長先生はうれしそうに大声で言いました。地域の人にまつぼっくりから松の種が採れると教えてもらったときの出

しかし、平成十八年の夏、そのアカマツに異変がおきました。枝先の一部が茶色に変色し、しだいにそれが広がりを見せ始めたのです。百年以上元気に育っていたアカマツの変化に、里美はとても心配になりました。

(いったい何がおきているの。)

日に日に弱っていくアカマツ。その様子を見ていた里美たちや先生は、毎日木を心配そうに見ては、再び元気になることを信じていました。校長先生と地域の人たちは、アカマツを何とか守りたいと何度も話し合い、植木屋さんがボランティアで消毒をしたこともありましたが。

しかし、人々の強い思いはアカマツにはとどきませんでした。アカマツはどんどん弱り、ついには切られることに決まったのです。

「どうして切らなければならないのですか。みんなが大好きな特別な木なのに。」

里美は先生にうったえました。すると先生は、さつそうに静かに話し始めました。

「木のお医者さんによると、あのアカマツは害虫にひどく

来事です。学校にはアカマツがまだ元気なところに教材用に集めていたまつぼっくりがあり、校長先生はすぐにピンセットで種を取り出し、苗床にまきました。

里美たちもこのことを聞き、毎日苗床を見に行きました。一日目、二日目、三日目。子どもたちも先生も地域の人たちも、願いは一つでした。

そしてある朝、里美は土から緑色のはりのような物が出ているのを見つけました。

「やったあ。芽が出たよ。あのアカマツの芽だよ。」

里美はうれしきでいっぱいになり、声をあげました。「アカマツ二世」の誕生を聞いた地域の人たちも、とても喜びました。

今、学校では「百年計画・夢プロジェクト」として、百年以上みんなを見守り続けた以前のアカマツのようになってほしいと願いを込め、子どもたちが中心となり大切にアカマツ二世を育てています。また、切られたアカマツも切り株となって学校の玄関に展示され、今でも人々を優しく見守っています。



芽を出したアカマツ二世



元気なころのアカマツ